

2023年1月15日顕現後第2主日

旧約聖書 イザヤ書 49章 1-7節

使徒書 コリントの信徒への手紙一 1章 1-9節

福音書 ヨハネによる福音書 1章 29-41節

本日の福音書は、「ヨハネによる福音書」における弟子の召命の物語です。それは共観福音書の物語とは大きく異なっています。また、先週の福音書は、イエス様の洗礼の記事でしたが、福音書が異なりますので、お話が続いているわけではありません。しかし、本日の福音書の冒頭は、「**その翌日、ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った**」（ヨハネ 1：29）となっています。つまり前日に洗礼者ヨハネはユダヤ人から「あなたは、どなたですか」尋ねられて、自分について洗礼を題材として答えていました（ヨハネ 1：19-28）。ヨハネが行うイエス様への証は、洗礼という事柄と深く結びついていたのです。

さて、そのような結びつきの中で、本日の箇所には、一つの特徴があります。それは「見る」という動作の重要性、登場人物が「見る」という動作から次の行動へ移っているということです。ただし、「見る」を意味する動詞の種類は箇所によって異なりますので、ここの動詞の固有の意味が重要なものではありません。

洗礼者ヨハネは、イエス様が来られるのを「見て」、「**見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ**」と告白を始めます（ヨハネ 1：29）。また、イエス様に聖霊が降るのを「見た」と証言します（ヨハネ 1：32）。また、最終的に「**わたしはそれを『見た』。だから、この方こそ神の子であると証ししたのである。**」（ヨハネ 1：34）と、イエス様を「神の子」とまで告白するに至るのです。

この洗礼者ヨハネの「見る」という動作の重要性は、そのあとの弟子たちにも継続します。「ヨハネによる福音書」の弟子の召命の特徴は、ヨハネの弟子たちであった二人が、突然イエス様の弟子になっていくという展開にあるのですが、そこにおいても「見る」という事柄が関係しています。

洗礼者ヨハネは、「**歩いておられるイエスを見つめて、『見よ』、神の小羊だ**」（ヨハネ 1：36）と語るのですが、ここでの彼の役割は終わります。そして、その後、物語は弟子たちを中心に展開します。それまで洗礼者ヨハネに従っていた「**二人の弟子はそれを聞いて、イエスに従った**」となるのです（ヨハネ 1：37）。物語は、聞いただけで従ったと語るのですが、「見よ」といわれて彼らはイエス様を見たのだろうと推測させます。その後、彼らはイエス様の宿泊場所を尋ねるという不思議な展開になるのですが、それもイエス様がどこに泊まっているのかを「見た」と語るためです。そして、彼らは一緒に泊まります。「見て」「宿泊した」という不思議な展開ですが、それはこの二人が、「見た」あとに師匠と生活を共にする、師弟関係に入ったことを意味しています。

日課の福音書は、1章 41節で終わっており、「**彼は、まず自分の兄弟シモンに会って、『わたしたちはメシア——『油を注がれた者』という意味——に出会った』と言った**」とあります。イエス様を「見た」洗礼者ヨハネの弟子たちは、すぐにイエス様の弟子になり、イエス様を「メシア」と告白したという結末です（ここには「メシア」という言葉をそのまま音訳している珍しい箇所です）。

さて、「ヨハネによる福音書」は、すでに有名になっていたと思われる弟子の

召命の物語があるにもかかわらず、なぜこのような物語を描いたのでしょうか？しかも、「見る」という動作と関連させて物語を展開しているのでしょうか。その理由の第一は、イエス様の出来事とは、「見る」ことのできるような実際の事柄であると強調しているということです。ただしそれは、見なければ信じたことにならないという意味ではありません。むしろ逆です。イエス様の出来事とは、いつでもだれでも「見る」ことのできるほど確実な事柄である。それゆえ、見ないで信じることが大切であると促しているのです。

それでは、なぜ、そのようなことがいえるのでしょうか。それは「ヨハネによる福音書」が、「見る」ことのできる確実な出来事によって派生する、人間の「信じる」こととは、人間的な判断（何をどう見たかなど）や関係（誰の弟子であったかなど）、それらすべてを超えた、主なる神様のなさることに他ならないと主張しているからです。共観福音書における弟子の召命は、イエス様の招きに強調点がありますが、「ヨハネによる福音書」における弟子の召命は、そのイエス様の招きすら人間的な関係として超越して、すべてが主なる神様のなさる出来事にほかならないとするのです。つまり、イエス様の出来事に触れたわたしたちは、瞬時に主なる神様によって、「信じる」世界に入るということです。人間の側では、様々な理由や根拠をもって「信じる」に至るのですが、その「信じる」ことにかかわるすべてが、主なる神様の恵みによる事柄にほかならないということです。「ヨハネによる福音書」は、イエス様を「信じる」ことを、どの福音書よりも強調しているといわれますが、この意味においてはほかなりません。

「信じる」こと、「信仰」について考えるとき、「理性」との関係はどうとらえるべきかが問われる場合があります。「ヨハネによる福音書」は、その「理性」を軽視しているようにも思えます。しかし、そうではないのです。「信じる」とは、「見る」ことも通した理性的な事柄を前提としたとしても、それらの人間的な事柄を超えた、主なる神様の行為に他ならないのだと強調しているのであり、決して「理性」を無視していないのです。「理性」を無視することではなく、超えることが大切なのです。

これらのことは、イエス様によってもたらされた「救い」とそれを「信じる」ことに関して、大切な事柄を示します。何かを「信じる」ことの強調は、時として異文化・他宗教・他者の意見への否定へつながる場合があります。利害関係は妥協点を見いだす場合がありますが、正義のぶつかり合いはそうはならない事例も多くあります。しかし、「ヨハネによる福音書」が語る「信じる」ことは、そうではありません。それらへ異なる何かへの否定・排除ではなく、新しい「信じる」世界へと多くの人々が訪れることを待ち続ける世界を創造します。その意味で、「ヨハネによる福音書」が示す世界とは、常に現在に開かれた世界なのです。

教会もわたしたち一人ひとりも、新しい年・年度を迎えたという時間線の中で生きています。またその新しい年にも争いがあります。しかし、「信じる」時、わたしたちは、それらを超える信仰の世界にも生きています。そのことを改めて確認し、平和へとつながる歩みを創造し続けたいと思います。